報告一

「本物の男」と「複写男」のあいだで

：南スーダン紛争後社会における瘢痕とハイブリッドな「男らしさ」

橋本栄莉

1　はじめに

人間の身体の表面に存在する皮膚は、自己とそれ以外のものを隔てる境界であり、自分自身を意味づけ、解釈するための境界でもある。私たちは、他者に眺められ、触られる皮膚を意識し、覆う、塗る、傷つける、滑らかにする、剃る、彩るといった様々な加工を皮膚に施し、「私（たち）とは何者であるか」という問い対する答えを表現しようとしてきた。『社会的皮膚』(The Social Skin) を執筆したT・S・ターナーは、人間の皮膚を、「生物学的・心理学的個人の存在の境界であるのみならず、『社会的自己』のフロンティア」[Turner 2012, p. 486] と位置づけた。つまり、私たちの皮膚は、ただ存在するというだけで、社会の中で意味づけられ、自身がなにものであるかを語り、他者とコミュニケーションをとってしまう主体なのである。

これを裏付けるように、瘢痕文身や入れ墨、タトゥー、ピアッシングや化粧といった皮膚の加工は世界各地で行われてきた。皮膚に施されたデザインやスタイルは、その人物の社会的地位や所属する集団の記号となったり、その人個人の「魅力」を表現したりする。今日では、特に非西欧社会における「伝統的」な身体加工は人権思想の観点から規制されたり、社会変容に伴い消失したりすることが珍し

くない。この状況下では、身体加工を「しない」身体もまた、世界と交渉する手段として有効なものである。従来の村落共同体から離れ、人々の世界は複数化した。それに伴い、身体加工それ自体の持つ記号性や意味ももはや単一のものではなくなった。若者たちの加工された／されていない身体からは、その人物を取り巻く秩序の複数性と、そのあいだの相克を読み取ることができる。

本論の目的は、南スーダンのナイル系農牧民ヌエル（Nuer）社会における「男らしさ」の要素の変遷を明らかにするとともに、二〇一三年末以降の紛争後社会において、「成人男性」の証とされてきた瘢痕をめぐっていかなる問題が生起しているのかを報告することにある。本論が問題にする「男らしさ」とは、ヌエルの人々が「本物の男」（*wuuri pany*, sing. *wut pany*）または「本物のヌエルの男」（*wuut Nueräˈ pany*）と表現する人物が持つ属性のことを指す。これを通じて、若者たちがどのような「社会的自己」を構築し、複数の社会空間や秩序の様式とコミュニケーションをとりながら生き残ろうとしているのかを検討する。

家畜であるウシに至上の価値を置くヌエルの男性は、成人儀礼の際に、ヌエル語でガール（*gaar*）[1]と呼ばれる五本または六本の平行線の瘢痕を額に施される。二〇世紀初頭、激しい痛みを伴うガールの施術によって、それまで「男児」（*dhɔ̈ɔ̈l*, sing. *dhɔ̈al*）とされていた者たちは、年齢組（*ric*）に加入し、「大人の男」（*wuutni*, sing. *wut*）になるとされていた。「大人の男」は、父親から財産であるウシを受け継ぐ等の新たな権利を得、様々なタブーを課される。ガールを得ることは、ヌエルにとって「大人の男」だけでなく、「本物の男」の条件でもあった。ガールの施術とそれに付随する「男らしさ」の概念は、一九五〇年代以降の二つの内戦や、二〇一三年末に南スーダンで生じた武力衝突以後、激しく変動することとなる。ガールは特定の民族集団を象徴するものとしてみなされ、民族対立化した戦闘の中で人々の運命を決定づけることとなった。

ヌエルのガールに関する先行研究は、社会におけるその機能や年齢組といった社会構造との関係を明らかにするもの［Seligman and Seligman 1932, エヴァンズ＝プリチャード　一九七八］と、内戦に伴う移動や社会変容の文脈において、世代意識やジェンダー観の変化との関係について報告するものがある［Hutchinson 1996, Holtzman 2000, Falge 2015, Shandy 2007, Feyissa 2011, Grabska 2014］。特に後者の研究群において、ガールは古い村落共同体的価値観やヌエルの旧来の「男らしさ」の問題であり、ガールを持たない者たちは、近代教育や西欧風の暮ら

しを意識する社会空間に生きる存在として描写される傾向にある。実際、ガールの施術を伴う通過儀礼は各地で行われなくなり、ヌエルの人々自身も、ガールはヌエルの「伝統」の象徴であり、教育や開発とともに消えてなくなるものとして語る。この側面を鑑みれば、確かにガールを消滅の途上にあるものと位置づけるのは無理もないかもしれない。しかし、だからといってガールに付随してきた諸観念、たとえば祖先や神性、共同体や年齢組とかかわる時空間の概念もまた消滅の過程にあるものとしてみるのは早計である。既存の研究において、ガールの存在をめぐる葛藤やガールを持つこと／持たないことによる諸問題については描写はなされているものの、描写の背後にあるガールに付随する価値の移植のプロセスや諸観念間の創発性や交渉過程については十分に検討されているとは言い難い。

本論が指摘したいのは、ガールの有無によって切り分けることのできない人々の生きる社会空間の在り方と、一見して消滅であるかのような現象が内包する価値の残存やエージェンシーの問題、そしてその都度解釈され直すガールや「本物の男らしさ」の要素である。ヌエル社会における「男らしさ」を構成する要素として、一九二〇―三〇年代では、ウシ、槍、ガールの施術および年齢組［エヴァンズ＝プリチャード　一九七八］、一九八〇年代以降には銃、紙とペンに象徴される近代教育、政治的文脈における言語能力［Hutchinson 1996］、そして一九九〇年以降のディアスポラ研究では、現金や車、仕事［e.g. Holzman 2000］などが社会変化の中で新たに価値を持つ要素としてあげられてきた。本論では移り変わる「男らしさ」の媒体と、伸縮する自己の帰属する共同体概念に着目し、紛争後社会を生きる若者たちが直面する重層的社会秩序との関連を、瘢痕をめぐる解釈から見出してゆく。

以下、第二節・第三節では、瘢痕が「民族」のシンボルとなってゆくまでの歴史的過程と、ローカル社会におけるガールと「男らしさ」の変遷を既存の民族誌的資料をもとに検討する。第四節・第五節では、筆者のフィールドワークに基づき、二〇一三年末前後の瘢痕の在り方と人々の対話を取り上げる。第四節では、一九八〇年代以降の南スーダンにおける施術経験の多様性を描くことで、学校教育を受ける／受けない、都市部／村落部という区分によって瘢痕の有無は決定しないことを指摘する。第五節では、移民・難民としてウガンダに暮らす若者たちの語りから、紛争後社会において「男らしさ」を構成する諸要素と瘢痕との関係について分析する。(2)

筆者は二〇〇九年から二〇一三年のあいだ、総計一九か月、南スーダンのヌエル社会でフィールドワークを行っ

た。ヌエルはナイル川流域を中心に居住する西ナイル系の農牧民である。内戦を経て、現在では国外や都市部など様々な地域にヌエルの人々は居住している。筆者はヌエルと隣接する民族集団ディンカ（Dinka）が共住する町や村落において調査を行うことが多かった。後述するように、ヌエルとディンカは二〇一三年末以降の紛争において対立する民族集団同士と表現されることの多い南スーダンの二大民族集団である。ヌエルとディンカはもともと南スーダン中部から北東部のナイル川流域に居住しており、家畜であるウシをめぐってしばしば略奪や戦闘を行ってきたが、同時に結婚を介した姻戚関係の形成やウシの貸し借りを通じた友人関係なども多く見られる[3]。両集団の境界地域には、ヌエル語、ディンカ語双方のことばを話し、両方のエスニック・アイデンティティを有する者も多い。

二〇一三年末に紛争が生じてから、筆者はウガンダのヌエルのコミュニティでフィールドワークを続けた。本稿で取り上げるデータの多くは、筆者が二〇一五年から二〇一八年にかけて、総計六か月間行ったウガンダのヌエルの移民・難民[4]コミュニティでのフィールドワークに基づいている。ヌエルは大別して、西ヌエル、ラック・ヌエル、ロウ・ヌエル、東ジカニィ・ヌエルという四つの下位集団に分けられる[5]。これらのサブ・グループでは、共有している言語や文化的規範が若干異なる[6]。過去の内戦で対立していた集団もあり、その政治的立場は多様である。「民族対立」化した紛争を経験し、国外で暮らしているからといってヌエルは一枚岩ではない[7]。様々な背景を持つヌエルの人々がともに暮らしていることがウガンダのヌエル・コミュニティの特徴でもある。

インタビューは主に英語、部分的にヌエル語で行った。簡単な質問内容であればヌエル語で行い、より込み入った複雑な経験について聞くときは、通訳を通じて英語で行った。

ガールに関する話題は大変センシティブなものである。本論で取り上げるように、ヌエルのコミュニティ内でも、ガールを持つ者、持たない者双方が何らかのコンプレックスを抱えている。加えて、所有者のエスニシティを物語るようになった瘢痕は、昨今の民族間関係や国家の動きといった政治的な話題と深く関係するため、瘢痕について部外者である筆者が積極的に話題にすることは困難であった。筆者は瘢痕について人々に直接聞くことはせず、若者たちが語る自身の未来やライフコース、そして故郷の話や内戦経験、恋人との関係など雑多な話題の中に織り込まれたガールの解釈に注目した。本稿で提示するデータの多くは、そのなかから抽出したものである。

2　瘢痕とローカル社会

（1）瘢痕の機能と意味

ヌエルのみならず、南スーダンの他のナイル系民族集団も成人儀礼の際に額に瘢痕を入れる慣習を持つ。瘢痕の形式や、施術の対象となる性別、年齢についてもさまざまである。例えば同じナイル系民族集団であるディンカ、シルック（Shilluk）、マンダリ（Mandari）なども額に瘢痕を施している。瘢痕の形状は、必ずしも既存の民族集団の境界によって分類することはできない。例えば、六本の平行線はヌエルだけではなく一部のディンカにもみられる瘢痕の形状である。現在でもヌエルと同じ形状を持つディンカは存在する。また、ディンカであっても、例えば四本の平行線や、深いV字、浅いV字など、居住地域や出自集団によって異なる瘢痕を持つ。つまり、瘢痕はある民族集団の出身であることを部分的に示すかもしれないが、必ずしもそれは人々のエスニシティと一致せず、むしろその多様性は従来の集団関係が柔軟であり流動的であることを物語っているのである。

すでに述べたように、通過儀礼の経験と瘢痕の有無は、ヌエル社会において「本物の男」の条件であった。成人儀礼を経てガールを得ることは、男性の人生を大きく変える出来事である。成人儀礼そのものも、瘢痕と同様ガール（以下、ガール儀礼）と呼ばれる[8]。ガール儀礼において、施術者は剃刀で男児の額に深い傷を刻んだのち、ウシの糞を燃やした灰を傷口に塗り込む。これによって、術後も平行線がはっきりと浮き上がるようにする。なかには頭蓋骨にまで傷が達することもあるという。この儀礼を経て、彼らは「男児」や「女性」とは明確に区別され、女子どもの仕事とされる搾乳の禁止や、性交渉にかんする禁忌、そして食事の作法や肉の可食部位[9]など新たな規範の中に身を置くことになる。

ガール儀礼は、同じ年頃の男児が数名まとまって行う。最低でも二人以上は必要である。というのも、一人でこの儀礼を受けると死んでしまうと考えられているからである。同時に施術を受けた男児たちは同じ年齢組[10]に加入し、ともに血を流した者同士、生涯にわたって兄弟と同様の強い絆で結ばれる。この儀礼を経た「本物の男」だけが、ウシの略奪や報復といった武力紛争に参加することができる[11]。

一九二〇年代から三〇年代にかけて調査を行ったエヴァンズ＝プリチャードの報告によれば、多くの男児は一四歳から一六歳のうちにガール儀礼を行っていた。それ以前には、一六歳から一八歳までのあいだに行われていたと

いう［エヴァンズ＝プリチャード　一九七八、三七七頁］。一九八〇年代には、ガール儀礼は九歳から一三歳までに行われるようになり［Falge 2015, p.126］、施術の対象は低年齢化していったことが伺える。この背景には、内戦により多くの男性が命を落とした結果、父親の財産を引き継ぐ「大人」の男が必要とされたことや、戦闘に参加する一つの条件が瘢痕を有する「大人」であったことが指摘されている［Hutchinson 1996, p. 290］。

（2）ガールと共同体の時間意識

ガール儀礼は、父またはそれに代わる人物の指示あるいは許可のもとに行う。ガール儀礼は、ガールの施術と、地域によっては下の前歯四本の抜歯を伴う。ガール儀礼を経て、「大人」となった男性は父やおじからウシや、ウシ名[12]、槍名の継承が可能になる。ヌエルではクランやリニィジに槍の名があり、儀礼の際にその名を呼んだり、尊敬の念を込めてその名で人を呼んだりすることがある。槍は実在するわけではなく、「祖先の槍」という観念自体に価値が置かれている。彼らが「槍」について語る時、心に思い描かれているのは実際の槍の形状でなく、また観念上の槍ですらなく、総体としてのクランのことであるという［エヴァンズ＝プリチャード　一九八二、三八〇頁、三八七―三八八頁］。すなわち、ガールとともにある祖先の槍名は、人々がいうところの居住空間や出身地を意味する空間・物質としてのチエン（家）を指すものであり、同時にその中で共有されるヌエルの価値規範、概念としてのチエン（文化・やり方）なのである。チエンの概念については後述する。

年齢組への加入が特に影響を与えるのは、他集団との政治的関係においてではなく、日常生活における共住集団内の人間関係においてである。ガールの有無は恋人関係や結婚にも影響し、この点は現在でも若者たちの悩みの種となっている。年齢組体系内の関係は、家族関係とかかわる用語で表現される。例えば自分の父の年齢組に属する者、父の兄弟の年齢組に属する者たちは「父」と呼ばれ、これらの「父」の妻たちは「母」と呼ばれる。そして息子の年齢組の構成員の妻たちは「娘」と呼ばれる［エヴァンズ＝プリチャード　一九七八、三九三頁］。年齢組上の「娘」や「母」たちと交わることはインセスト（*ruat*）に位置付けられ、厳しく制限されている。

こうした日常の社会関係は、ヌエル社会全体における社会構造および秩序の形式と深く関係する。ヌエル社会は従来、出来事と出来事のあいだを測るための抽象的な時間の観念は持たなかったが、代わりに発達していたのは、集団と集団との構造的距離によって「歴史」を語るすべである。

高度に分節化された系譜構造を持つヌエルの父系出自集団は、集団の編成と分裂という流動性を生み出す基盤である[エヴァンズ＝プリチャード　一九七八]。ヌエル出身の父親を持つ者は、幼いころから自身の父方の父系親族、母方の父系親族の系譜、つまり祖先の名を複数世代にわたって記憶するよう努めることが期待されており、これは社会変容や国家を超えた移動を行う現在でも変わることがない[橋本　二〇一八]。

この社会において、共通の祖先名に言及し、過去に共有した時間を語ることは、普段は意識されない他集団との差異化を図り、一時的な集合的アイデンティティを構成することにつながる。これと同様に、特定の年齢組間の距離に言及することにより出来事間の時間を測り、共有することが可能になる。つまり、ガール儀礼と年齢組への加入は、日常生活における秩序を生み出すとともに、社会全体が共有する歴史を辿り、時間意識の共有とともに集団を生み出す手段でもあったのである。

3　ポストコロニアルな身体と「男らしさ」の変遷

（1）「民族化」する身体と瘢痕

瘢痕が特定の民族集団の象徴として語られ、エスニック・アイデンティティと結び付けられるようになったのは、植民地統治期以降に南スーダンにおいて「民族」が発明され、政治的軍事的に運用されるようになってからである。一九世紀末よりイギリス統治下にあったスーダン南部地域において、統治をスムーズに進めるための政策の一環としてヌエルとディンカの間に地理上の境界線が引かれ、両民族集団には強制移住と定住化が促された[Johnson 1982]。その後、スーダン地域は、一九五六年の（旧）スーダン共和国独立直前に勃発した第一次スーダン内戦（一九五五―一九七二）、そして第二次スーダン内戦（一九八三―二〇〇五）の内戦期に突入した。内戦は北部勢力と南部勢力の間で勃発したが、第二次スーダン内戦中の一九九〇年代、南部勢力であるスーダン人民解放軍（Sudan People's Liberation Army, 以下SPLA）内で党派対立が顕在化した。党派の異なる司令官同士の争いは、徐々に司令官の出身民族集団の軍人を巻き込むかたちで展開し、ついにはディンカとヌエルの間の凄惨な民族対立と化した。この状況の中で、ヌエルとディンカそれぞれのエスニック・アイデンティティは「軍事化」され、多くの市民が戦闘へと動員されていった[Jok and Hutchinson 1999, Hutchinson 2000]。この時の衝突は、南スーダン独立後の武力衝突の「民族紛争」化にも影を落とすことになる。

植民地期以降の国家情勢は、従来のゆるやかで重層的な民族境界を示す瘢痕を、確固たる民族境界に基づき区別されるものとして位置付けを変化させた。

第二次スーダン内戦中の一九八六年から一九八七年にかけて、西ヌエルの地域においてガールの施術はSPLAの司令官によって禁じられた[Hutchinson 1996, p. 296]。また学校教育を受けた者のなかからも、後述の「種牛男児」のように施術を拒絶する者が現れた。司令官らがガール廃止の理由として挙げていたのは、健康被害やグローバル化の影響に加え、ディンカがすでに瘢痕の慣習を廃止していることであった[Hutchinson 1996, p. 296]。当時、SPLAの司令官たちは、民族集団を超えて理念を共有する者たちの集合である軍隊を創り出そうとしていた。軍隊階級の決定の際には、同じ民族集団の出身者を優遇するのではなく、出身民族にとらわれずに階級を決定することを推奨していた。瘢痕の施術禁止は、軍事訓練を従来の年齢組に取って代わる成人儀礼として新たに位置付けるためのものでもあったと指摘されている[Hutchinson 1996, pp. 270-298; Grabska 2014, p. 52]。

一方で、「ディンカと見分けがつかなくなる」という不満も施術廃止に反対するヌエルの人々から寄せられていた[Hutchinson 1996, p. 296]。ディンカとヌエルの間の対立に加え、ヌエル内部の集団間対立が凄惨化していた一九九〇年代には、ガールがあることによって他のヌエルによって殺害されるリスクが低くなるということも信じられていた[Falge 2015, p. 127]。瘢痕廃止の推進派と反対派のいずれの意見も、政治的立場を示すものとしての「民族」ないし瘢痕が意識されるようになったことを示している。

その後、多くのヌエルの人々が国外の難民キャンプや第三国定住、都市での生活を経験した。ヌエルの村落部においても、キリスト教化や学校教育が進んだ。この状況の中で人々が直面したのは、紙とペン、つまり学校教育の経験と、現金という交換媒体を中心に回る世界であった。

この中で、ガールの施術は必ずしも「大人の男」の条件とはされなくなっていった。しかし、故郷を離れたディアスポラのなかには、「南スーダン人」や「ヌエル」というナショナル・アイデンティティやエスニック・アイデンティティを強く持つ若者も現れた。SPLAの司令官によって禁じられたガールを施術するために、施術者のいるスーダンの首都ハルツームの難民コミュニティまで赴く者もいたという[Hutchinson 1996, p. 297]。

南スーダン共和国は、二〇一一年に独立を達成したものの、独立前後から国内で武力衝突が頻発していた。内戦以

降の政治軍事状況において、従来の地域間紛争であるウシの略奪やその報復も「民族対立」の様相を帯びるようになった。当事者による平和構築機能や規範[13]は破綻し、当該民族出身であるだけで殺害の対象とされるようになった。村落部に暮らすヌエルの若者男性らは、ホワイト・アーミー（*dec in bor*）[14]と呼ばれる武装集団として反政府運動や特定の民族集団への報復行動に参加するようになった。こうした戦闘行為への加担の背景には、民族集団への敵愾心以外にも、新国家や国連機関への失望や憤りといった人々の感情が存在していた［橋本　二〇一八、三一五―三二七頁］。

二〇一三年末、南スーダンの首都ジュバにて大規模な武力衝突が発生した。もともと衝突は、軍内部における大統領側近と元副大統領側近の間で生じた。しかしながら、この衝突は徐々に拡大し、政府内部の大統領派と元副大統領派を巻き込む争いとなった。さらには、大統領の出身であるディンカと、元副大統領の出身であるヌエルの間の対立を煽ることとなり、両民族集団間で激しい武力衝突や、一方的な虐殺が展開した。元副大統領派は、のちにSPLA野党派（SPLA-in-Opposition, SPLA-IO）としてSPLAより分離することになる。

ヌエルはSPLA-IO支持者とみなされているものの、実際にはSPLA支持者も存在し、民族集団によって政治的立場を判断することはできない。しかし、二〇一三年以降の状況において、瘢痕は自身の出身民族集団を示すエスニック・マーカーとしての意味合いを再び強く帯びるようになった。瘢痕を持つ者は、実際の出身民族集団や政治的立場に関わらず殺害のターゲットとなったのだった。

このように、植民地期以降の政治的文脈において、瘢痕を出身民族集団やエスニック・アイデンティティの象徴であるとする考えが前景化してきた。現代の南スーダンでは、瘢痕を持つ身体はとかく特定の民族集団の「証」として話題に上るが、それは従来の在り方とは異なるポストコロニアルな身体であることが指摘できる。その一方で、ナショナル・イデオロギーに支えられた人々のアイデンティティや瘢痕の価値は、次で取り上げるように必ずしもローカル社会や人々の日常生活におけるそれらと同一ではなかった。

（2）内戦期以降の「男らしさ」の変遷

東アフリカの年齢組体系は、西欧諸国による支配の影響を受けて急速に変容した最初の制度であると言われている［エヴァンズ＝プリチャード　一九七八、三九一頁］。ヌエルの場合も、植民地統治やその後の内戦、社会変容の文脈でガールとかかわる「本物の男らしさ」の条件は徐々に変

化していった。

植民地期統治期以後に「男らしさ」の条件として加えられたのは、演説の能力や言語運用能力であった。植民地統治期に首長制が成立して以降、行政や外の集団との交渉力を持つ者、読み書きのできる者が首長として選ばれるようになったことがこの背景にある［Hutchinson 1996, pp. 271-296］。一九八〇年代以降の内戦期、槍に代わって新たな「男らしさ」の要素とされたのが銃であり、その所有が示す戦闘経験であった。戦闘経験は、内戦期の南スーダンで醸成されていたナショナル・アイデンティティと連動しつつ、自らの属する家族や村落共同体を自衛するために重要な「本物の男」らしさの要素とされた。

しかし、「男らしさ」の要素は、ガール・年齢組から銃へ、銃から近代教育へと単純に推移するものではない。それを示すのが、ローカル社会が男性に与えた様々な名称である。表1は、一九八〇年代以降の男性のありかたを象徴する表現とその意味合いである。これらの多くは、地域の女性や年配者らによる蔑称であるとも言え、男性自身が名乗るものではない。

表１　男性に与えられた名称と由来

名　称	名称の由来など	備　考
種牛男児 (*tut dhoali*)	身体的には成熟しているが、カテゴリーとしてはまだ「男児」であるガールを持たない男。	一九八〇年代初頭～南部スーダン
ガールの男 (*wuutni gaari*)	ガールの施術時の痛みに耐えることができた「だけ」で他の知識を持たない男。	一九八〇年代後半～南部スーダン
ドミノマン (domino man) 酒狂い (*kuong yong*)	戦闘経験しか持たない、近代的な世界では役に立たない、ドミノばかりしている、または酒ばかり飲んでいる男。	一九九〇年代～二〇〇〇年代ケニア・カクマ、二〇〇〇年代南部スーダン、ウガンダ
女性擁護風男性 (pro-women men)	「近代的」な男女平等意識を持つことをアピールするものの、村に帰ると家父長的的振る舞いをする男。	一九九〇年代～二〇〇〇年代、ケニア・カクマ
国連の「子ども」 (children of UN)	男が父からウシを得る（継承する）のは通常一度だけであるが、国連からは恥ずかしげもなく何回も物資を得る男。	一九九〇年代～二〇〇〇年代、ケニア・カクマ
複写男 (photocopy man)	「オリジナルな男」に対する「偽物の男」。ガールを持たない男。	一九九〇年代エチオピア、二〇〇〇年代ウガンダ

＊（　）内に示したのは名称のヌエル語または英語である。
Hutchinson 1996, Grabska 2014 および筆者の聞き取りに基づき作成

一九八〇年代にヌエル社会でフィールドワークを行った人類学者S・ハッチンソンによれば、この時期、一部の地域でガール儀礼を継続すべきかどうかという議論が持ち上がった[Hutchinson 1996, p. 296]。この背景には、前述したガール施術の違法化やキリスト教や近代教育の普及という新たな展開があった。教会に通い、学校に通うようになった若者たちの間では、ガールは「古臭い文化」の象徴であるとみなされ、徐々にガール儀礼は拒まれるようになった。このようにガール儀礼を拒んだ者たちを、人々は「身体は成熟したが分類的にはまだ男児である」という意味合いの「種牛男児」(*tut dhoali*)と呼んだ[Hutchinson 1996, p. 270]。

「種牛男児」の登場は、旧来の世代観やジェンダー観に混乱をもたらした。「種牛男児」らの発言は、「本物の男」のものと比べて価値が劣るのだろうか、彼らが受け継ぐべき財産の権利はどうなるのかといった様々な議論がローカル社会では噴出した。特に男児を持つ母親にとって、息子がガールを持つことは一種の「昇進」であったし、周囲の年配者や宗教的職能者は、ガールがないことによって、祖先や人間の究極的な祖先であり、至高の霊的存在であるクウォスによる祝福が受けられず、不幸や災難が起こるのではないかとも危惧していた[Hutchinson 1996, p. 296]。

しかし、近代教育を受けた若者たちが政府の役職についたり多くの現金を稼いだりするようになると、人々は以前のように彼らを「子ども」扱いすることに戸惑いを覚えるようになった。そしてついにガールは、時代遅れまたは「無知さ」の象徴としても語られるようになった。ガールを持つ男は、侮蔑の意味を込めて「ガールの男」(*wuutui gaari*)と呼ばれた。これには、痛みに耐えることができた「だけ」の男であるというニュアンスが込められている[Hutchinson 1996, p. 291]。しかしその一方で、クウォスや祖先の機嫌を損ね不幸を招くのではないかという懸念は持続していた[Hutchinson 1996, p. 271]。さらに同時に展開していた国家規模の紛争に巻き込まれていたローカル社会において、ガールの有無とは別に、兵士として銃を持ち戦うことが「成人男性」としての義務であり、そうでない者は「女性」とみなされる風潮もあった[Hutchinson 1996, p. 134]。

第二次スーダン内戦のさなかに国外の難民キャンプに逃れ、ジェンダーに関する国際ワークショップや近代教育を受けた若者たちのあいだでもまた、「男らしさ」をめぐる議論は活発に行われることになる。男性たちは、従来の生業である牧畜を営むことができず、また戦闘に参加することもできなくなった。キャンプでは国連をはじめとする国

際機関に全面的に生活物資を依存することになり、若者や子どもたちは学校や教会に通う中でより「近代的」な考え方や西欧風の生活スタイルにあこがれを抱くようになった。年長者たちが村落部で重んじてきたヌエルの価値観は軽んじられるようになり、キャンプでは世代間の断絶が生まれていった。

二〇〇〇年代にケニアのカクマ難民キャンプと、その後南スーダンの村落部に帰還した難民たちのジェンダー意識の変動を追ったグラブスカは、難民キャンプで観察された「情けない」男たちに関する語りを報告している [Grabska 2014]。従来の「男らしさ」を獲得することが難しくなった男たちは、「種牛男児」や「ガールの男」に続く新たな名称、または蔑称で呼ばれることになる。当時の男性たちがこのように揶揄される現象の背景には、紛争下で深刻化していた男性による家庭内暴力や性的虐待の問題があった [Hutchinson 2000; Grabska 2014, pp. 53-54, pp. 85-88]。難民キャンプで就労するわけでもなく、学校へ通うこともない中年以上の男性たちは、「ドミノマン」や「酒狂い」と呼ばれた [Grabska 2014, pp. 81-85]。この名称の由来は、彼らが日がな木の下に集まってドミノというボードゲームに興じていたり、酒浸りになったりすることから来ている。この光景は難民キャンプのみならず南スーダン国内でも見られ、この名称は女性たちや年配者の嘆息や愚痴とともに登場する。

しかし、学校に通い「近代的」に生きようとする男たちに対しても人々は厳しい目を向けていた。カクマの難民キャンプでは、自ら生業を持つことなく援助機関に生活物資を依存している事態に対し、成人男性たちは「国連の子ども」であると表現されていた [Grabska 2014, p. 86]。通常、男性が保護者である父やおじから財産であるウシを得るのは生涯一度だけであるが、難民キャンプでは、彼らは何度も国際機関から物資を得ている。この表現は、彼らはもはやコミュニティを受け継いでゆく「大人の男」ではなく、単に国連の「子ども」に過ぎないというニュアンスを持つ。

また、難民キャンプで新しいジェンダー意識を学び、「伝統」からの女性の解放や男女平等を声高に叫ぶ男たちにも注意が必要であるという。現代社会のジェンダー問題に敏感な「エリート」志向の男性たちは、アフリカの家父長的規範からの離脱や女性のエンパワメントの重要性を主張する。しかし彼らの言動の背後には、国連から奨学金などを得るため等の目的が隠れていることを女性たちは知っていた。実際にこのような人物がいざ南スーダンに帰還するや否や、それまで否定していたはずの家父長的規範を振りかざす傾向にあるのだという [Grabska 2014, pp. 84-85]。

（3）「本物らしさ」への問い

一九九〇年代以降に語られるようになった「複写男」(photocopy-man) は、筆者がウガンダで知りえた表現である。先述の歴史的経緯からもわかるように、現在ガールを持たない男性は、ガールを持つかつての「本物の男」と差のない存在として語られる。しかし、一九九〇年代、エチオピアのヌエル居住地域では、ガールを持たない男たちは「複写男」として主に女性たちのあいだで揶揄されていたという。「複写男」と呼ばれることを恐れた、国外で学校教育を受けて育った男が、かなりの年齢になってから村の男児とともに施術を行ったことはウガンダでも話題になっていた。

この語は、「コピーをとる」という英語の動詞 photocopy に由来する。この言葉のニュアンスを理解するには複写機を想像するとよいだろう。複写機から出てきた複製された紙には、当然のことながら、オリジナル・コピーとまったく同じものが印刷されている。「複写男」という語は、この複製された紙に対する「本物らしさ」への疑念と不安が体現されたものである。複製された紙、つまりガールを持たない男たちは、本当の意味でオリジナル・コピーと同じものとみなしてよいのだろうか、という問いがこの語には付随している。ファルゲによれば、一九九〇年代には、ガール儀礼の経験者は身体のみならず「心の瘢痕」を持つとされ、ガールを持たない男性と比べ心身共に「本物の男」であると見なされたと言う [Falge 2015, p. 128]。

これらの男性の名称または蔑称の変遷からわかるのは、若者男性に向けられている女性やローカル社会の期待と失望であり、目まぐるしく変化し、共在する秩序の複数性と流動性である。「男らしさ」はそれだけでは存在せず、異性や共同体の視点や文脈によって大きく姿を変える。ローカル社会においては、ナショナル・イデオロギーやその中で醸成されたエスニック・アイデンティティに影響を受けながらも、それとは少しずれたところで、ローカル社会の「男らしさ」は変遷してきた。次章以降で取り上げる事例からは、「本物の男」とは何かと言う問いに複数の秩序の様式から答えようとする若者たちの姿が見えてくる。

4　ガールのある身体とない身体

（1）一九九〇年代におけるガールの施術経験

ヌエルの人々の間では、教育を受けて都市部に暮らすと決めた者と教育を受けずに村落社会に残ると決めた者とのあいだでガールの有無が分かれると語られる。しかしながら、彼らの決断はそう単純に決まるものではない。筆者が

調査を行っていた二〇一〇年代、首都や州都でも、また村落部でも、ガールを持つ者と持たない者は共存していた。若者たちはもちろんのこと、年長者であってもガールを持たない者も多くいた。ガール儀礼の違法化が一九八〇年代から始まったことを考えれば、世代の差によってガールの有無を判断できないのは当然である。一方で、都市部においても一二～三歳の瘢痕を持つ「大人の男」は確かに存在した。後述の事例に登場するガールを持つ男性たちは、一九九〇年代に施術を経験しており、違法化後も細々と儀礼は続けられていたことがうかがえる。

ヌエルの人々は、瘢痕の有無によってその人物のおおよその来し方を想像できるのだと語る。南スーダンの首都ジュバやウガンダの首都カンパラといった都市部ではガール儀礼は行われることはないため、瘢痕を持つ者は幼少期に村落部で過ごしたことが推察される。中には、ガール儀礼を受けるため、施術ができる村落部へと一時的に移動する者もいる。以下に取り上げるように、同じ移動歴を持ち経験の多くを共有する兄弟であっても、ガールの有無が分かれていることは珍しいことではない。

〔事例一〕兄弟によって異なるガールの有無

三〇代の兄弟、兄ジェームズ[15]と弟ガブリエルは、兄がガールを持たないのに対し、弟は非常に深い――壮絶な痛みを伴う施術を想起させる――ガールを持っていた。第二次スーダン内戦のさなかには一家はエチオピアに難民として渡っており、その後さまざまな地域を転々とした。ジェームズとガブリエルは双方とも既婚であり、母親とともにタウンに暮らしていた。兄ジェームズは国際機関で働くために就職活動中、弟ガブリエルは政府機関に勤めていた。両方とも、年少の頃より学校に通い高等教育を受けた「エリート」であるといえよう。

村落部にいた時、兄ジェームズはガール儀礼を拒否していた。学校教育を受けていつかタウンに出る予定であったし、苦痛を伴う施術を行うことが嫌だったからだという。しかし、彼の母親をはじめ親族はそれを許さなかった。ガールの施術は最後まで抵抗して入れるのを免れたが、下の前歯四本については大人たちに押さえつけられ抜かれてしまった。一方、弟のガブリエルもまた、将来はタウンで働くことを予定しており、学校に通っていた。しかし、当時の同級生からのプレッシャーもありガールを入れることを決意した。兄ジェームズは、ガールに対して否定的な態度をとる一方で、弟が持つ深いガールについては誇りに思っている。

このように、同じ兄弟間であっても、個別の環境や信念

によりガール儀礼の経験やガールについての態度は様々である。祖国で内戦が展開している、つまり自分の親きょうだいが戦闘へと参加するなかで、学校へ通い、ガールを入れることも入れないことも自身で選ぶことができた九〇年代は、ガール儀礼をめぐって、本人の選択と親族をはじめとする社会の選択がせめぎ合う過渡期と言えるかもしれない。次のステファンの事例からもその様子がうかがえる。

〔事例二〕クラスメイトによる圧力とガールの施術

一九九〇年代後半に施術を受け、上ナイル州出身でガールを持つ三一歳のステファンは、高等教育を受け、カンパラで就職活動中である。ステファンは村を出て五年間スーダンの首都ハルツームで過ごし、その後二〇一〇年からカンパラで暮らしている。彼はガール儀礼を受けた経緯を次のように語った。

「村に暮らしていたとき、施術を受けることを決めた。というのも、クラスメイトたちが先生のいないところでガールを持っていないことでいじめてくるから。自分の兄弟や（父親代わりの）おじは、自分に施術を受けて欲しくなかった。でもいじめに耐えるのにもう疲れたから入れた。でもこの選択には満足している。肉の特別な部分を食べることができるし、戦闘にも参加できるから。兄弟の中では自分は唯一ガールを持っている。でも、いまだに村に帰ると年齢組の仲間にはいじめられる。ガールを持っているからって偉大な人のようにふるまっているわけでもないのに、自分の兄弟にもいじめられる。[16]」

ステファンもまた、学校での経験、同級生からのいじめや圧力がガールを入れるか入れないかの一つの基準となっている。この決断において、彼のおじや兄弟がガールの施術に否定的であることは考慮されていなかった。あくまでも自身の選択であったことをステファンは強調した。

学校教育と内戦、ガール儀礼の関係について、グラブスカは次のように指摘している。「[引用者補足：第二次スーダン内戦が開始した]一九八三年以降、男らしさの概念はもはやガールに基づいてはおらず、解放闘争での経験、軍事生活の共有、銃の所有に基づいていた（…中略…）軍事経験、教育、違法な瘢痕の施術、そして南スーダン人としての新しい集合的アイデンティティの広がりは、新しい個人的、そしてコミュニティのアイデンティティを形づくるのに重要な手段であった」[Grabska 2014, pp. 48-49]。加えてグラブスカは、ガールや年齢組に対する態度の変化は、ハウスメイトやクラスメイトといった関係を構築するのに取って代わられたことを指摘する[Grabska 2014, p. 83]。しかしながら、先の事例で語られたガール儀礼の経験は、

単純に村落から都市へ、牛囲いから軍事経験、そして学校教育や西欧風の生活スタイルへという単線的な変化によっては説明できない。

ガブリエルやステファン、後述するジョージの語りからは、学校のクラスメイトの存在がガール施術に影響を与えていることがわかる。人々にとって「近代的」な社会空間であったはずの学校教育の現場は、新たなアイデンティティ獲得の場であったかもしれないが、同時にガールに付随する、痛みに耐え、戦いへと参加する資格を持つという村落的、または内戦下での「男らしさ」を強化し、あるいはその両者の相克が発生する場所であった。

では、ガールの価値や「本物の男」らしさはどのような要素によって判断されるのだろうか。ウガンダの移民・難民の若者たちの社会関係と、ガールの解釈をさらに取り上げよう。

5 「本物の男」とは何か？

(1) ウガンダにおけるヌエルの社会関係

ヌエルの男女の生活空間には、それぞれ独自のコミュニケーションが存在する。都市であれ、村落であれ、ヌエル社会において男女関係やその中で求められる「男らしさ」「女らしさ」は、親族関係のしがらみのなかで展開する。ヌエルは一夫多妻制であるが、特にキリスト教が普及した一九八〇年代以降、一夫一妻制を望む者も多く存在している。婚前の性愛関係は比較的自由であるが、基本的に男女の生活区分は分かれている。「近代的」な暮らしが営まれる都市においても、ヌエルの若い男女は、教会での礼拝や結婚式などのイベント、学生組合の活動以外で行動を共にすることはまれである。喫茶店であっても、ヌエルの男性がよく集まるところには女性たちは顔を出さないようにしているという。男性が多くいるところに頻繁に出入りする女性は多淫な「悪い女」(*ciek mi jiek*)であるとみなされる。

二〇一三年末以降、村落部から難民として多くの者がカンパラの親類宅に身を寄せていた。ウガンダにもともと暮らすヌエルの若者は、高等教育を受けるために滞在している移民が大半であった。しかし、武力衝突によって故郷からの支援が途絶えると学費がたちまち払えなくなり、そのまま難民としてウガンダの難民定住区に行くか、特にガールを持たない者は南スーダンに戻って戦闘に参加することも新たな選択肢として浮上する。また、ひとたび難民定住区に移っても、就労の機会を求めて再び都市へと移動する者も多い。この状況の中で、ガールとかかわる村落部的な「男らしさ」とナショナル・イデオロギーとかかわる「男

らしさ」、教育や就労を中心とした新たな規範という様々な秩序をめぐる駆け引きが行われていた。

大都市カンパラにおいても、男性同士のコミュニケーションでガールが話題に上ることも少なくない。たまり場の喫茶店に集う男性たちは、よく自らの恋愛経験について語ってくれた。筆者がガールを持たない者に話を振った際には、「(ガールのない額を指しながら)ほら見てごらん、こいつは女のことなんて知らない『男の子』(*dhol*)なんだから、そんなことを聞くものじゃない」と周りのガールを持つ者たちがその男性を茶化し、気まずい思いをしたこともある。

しかし、このような男性間のコミュニケーションに見られるガールの価値は、必ずしもカンパラに暮らすヌエルの若い女性たちが求めるものと一致していなかった。都市的生活に慣れ親しんだ女性たちは、恋人や結婚相手の選択にガールの有無は関係ないと主張する傾向にある。どちらかといえばガールのない男性を好む者もいるが、その男性本人に「魅力」があるのであれば、ガールの有無自体が恋人関係や結婚相手の選択において決定的となるわけではない。彼女たちのいう「魅力」とは、経済的な力はもちろんのこと、「都市的」な自分を理解してくれる人格の持ち主であるかどうかである。

ウガンダで教育を受け、「花嫁修業中」であった二〇代の女性ニボルも、当時の恋人の男性はガールを持たないが、別に持っていても気にしないと言った。一方、彼女が結婚相手として強く拒絶するのは、ガールの有無にかかわらず村落部で生きてゆくと決めた男性である。彼女は村落部に生まれ育った者のように、女性に期待される料理や家事、日々のふるまいが十分にこなせるとは思っていない。また村落部では自身が受けた教育の価値が理解されないであろうし、「村落風の暮らし」――ウシの乳を搾り、遠い井戸まで水を汲みに行き、年長者や夫、夫の親族に仕え、かいがいしく子どもの世話をする――に堪えることができないだろうと彼女は考えている。こうした村落部で理想とされる女性像を押し付けるのは「悪い男」(*wuut mi jiek*)である。

都市部に暮らす男性の中には、こうした「タウンガールズ」と呼ばれる高学歴で都会風の暮らしを知る女性を妻にすることを自身の「ステイタス」と感じる者もいる。しかし、教育を受けた女性は受けていない女性に比べて、婚資が高額となる傾向にある。婚資のウシの頭数がそれほど必要ではなく、夫に従順で家事育児に専念する村落部の女性を結婚相手として希望し、適齢期になると「花嫁探し」に村落部に戻る男性も少なくない。村落部で暮らす女性の中には、ガールを持たない男を「本物の男」として認めない

者もいる。都市に暮らす若い男性たちは、恋人の希望や結婚とかかわるライフプラン、自身が受け継ぐウシの頭数といった経済的事情に応じて、それぞれの相手が希望する「魅力」に自身を合わせようとする。次で取り上げる事例からは、自身とかかわる様々な位相の共同体が想定する秩序との付き合い方が、ガールを持つ／持たない身体の解釈を通じてみえてくる。

（2）ガールを持つ者たちの語り

まずはガールを持つ者たちがどのように自身のガールや「本物の男らしさ」と向き合っているかを紹介しよう。ガール儀礼の経験譚からは、ガールの施術によって彼らが得ようとしてきたものが見えてくる。

〔事例三〕共同体からの尊敬を得る

ロウ・ヌエル出身で、カンパラに暮らす三四歳のジョージは一九九七年にガール儀礼を受けることを決意した。ジョージは村落で生まれ育ち、二〇〇〇年にエチオピア、二〇〇六年にカンパラに移住した。一度、二〇〇八年に南スーダンに帰国し六年間ほど過ごして、再び二〇一四年にカンパラにやってきた。ジョージはガール儀礼の経験とそれを受けた理由を次のように語った。

「地域の人に尊敬されたいし、彼女が欲しかったから、女性と区別されたかった。それに自分の父親のウシをほかの兄弟に取られたくなかった。あと、学校のクラスメイトが（ガールがないことで）自分を『弱虫』と呼んでくるから、そのプレッシャーもあった。[17]」

クラスメイトからのからかいに加え、ジョージがガール儀礼を決意した理由として挙げたのは、女性からの区別、財産や恋人の獲得など村落部における「大人の男」としての権利、そして共同体からの「尊敬」であった。一九九七年はSPLAの内部分裂が名目上の終結であるとされる一九八八―一九九九年の目前である[Jok and Hutchinson 1999]。彼の言う地域の人々からの尊敬は、ミクロな社会関係のみならず、ヌエルという一「民族」と、戦闘可能な「大人」になることという意味合いも多分に含まれているであろうことが推測される。

〔事例四〕「家族の背景」の尊重

ラック・ヌエル出身のジャクソンは、カンパラ在住のラック・ヌエル・コミュニティをまとめている三二歳のリーダー[18]であり、カンパラのヌエルのカトリック教会の祭司でもある。彼は村落部で一九九七年にガール儀礼を経験し、その後二〇〇一年にハルツーム、二〇〇三年にジュバ、そ

して二〇一一年にカンパラへと移動した。ジャクソンがガール儀礼を受けた理由について強調したのが、「家族の背景」を尊重することであった。

「家族の背景を粗末にしたくなかった。他の仲間に追いつきたかったし、女子にもからかわれたから入れることにした。[19]」と彼はガール施術の動機を語った。

「家族の背景」とは、自分の連なる祖先を含む父系リネージあるいはクラン共同体のことである。先述のとおりヌエルの社会構造は分節化された父系リネージから成り立ち、この原理は、都市化や社会変容を経ても、人々が自身の属する集団を連想する際に必ず想起される。ガールを持ち特定の年齢組に加入することは、正式に自らの祖先群に加入することになり、それによって祖先への尊敬を示すことができると考えられている。ガール儀礼が行われなくなったことにより、年齢組は形骸化し、公的な年齢組の名称[20]は、現在あるものが最後になるといわれている。かつて、人々は自らの世代や年齢を年齢組に言及することによって説明していたが、今では単純に西暦で表現される。年齢組の話に及ぶと、都市部ではガールを持たない者であっても自分もその年齢組の一員だと主張することがある。しかし、それと同時に強調されるのは、年齢組の「正式な構成員」として必要だとされるガールの存在である。村落部においては、ガールを持たない者は年齢組の一員を名乗ることは許されないであろう。

ガールを有する者が主張したのは、祖先群をはじめとするヌエルの共同体への所属や尊敬の念とガールとのつながりであった。しかし、次に見てゆくように、共同体への尊敬を示すことは、ガールを持たない男性たちにとっても「本物の男らしさ」と人生のプランを語るための重要な要素となっていた。

(3) ガールを持たない者たちの語り

社会変化の中でガールを持たないことを選んだ者たちも、政治的立ち位置の表明――政府側か、反政府側か――や故郷との関係、日々の社会関係の中で新たな困難に直面している。ガールを持たない者は、都市部で暮らす分には問題なく、戦闘時に狙われることも少ないが、村落部に戻ったときには「(政府軍、またはディンカの)スパイなのではないか」という疑惑の目が向けられるのだという。ガールを持たない者の悩みは、もっぱら村落部やそこで展開する戦闘との関係にある。

〔事例五〕戦闘経験と「男らしさ」

ロウ・ヌエル出身、三〇歳のジュマは南スーダンの村落

部に生まれたが人生の多くを難民として南スーダンの外で過ごした。ガール儀礼は経験していないものの、調査当時はカンパラのロウ・ヌエルをまとめるコミュニティ・リーダーでもあった。当時のコミュニティ・リーダーのうち、唯一ガールを有していないのが彼であった。ガールがないことで、「女を知らない」と喫茶店で茶化されていた前述の男性もジュマであった。

しかしながら、ジュマはかつてホワイト・アーミーのメンバーとして戦いに参加したことに大きな誇りを持っており、その経験を次のように語った。

「二〇一一年から二〇一二年の間[21]、自分のウシを取り返すために戦いに参加したのが初めての戦いの経験だった。当時、戦い方もわからず、銃の使い方も十分に学ぶ機会はなかったが、自分の性格のおかげで、ガールがなくとも自分の「年齢組仲間」とは良い関係を築くことができていた。だから何の困難もなく戦いに参加できた。実際に、よく戦うことができた。なぜなら、タウンではサッカーチームに入っていたから。つまり足腰の鍛錬をしていたから戦闘の際も長時間走ることができた[22]」。

武器を取って自集団のために戦うことは、ガールを有するかつての「本物の男」にのみ許されたことである。ジュマは、銃や兵士であることがガールや年齢組に代わる「男らしさ」であるかのように語る。彼は戦闘経験とその「性格」のために自分自身を「年齢組の仲間」と位置づけた。このことは、ガールを持たない者が、村落部のガールを持つ年齢組の「正式な構成員」と関係を築くことが容易ではないことを示唆している。サッカーチームでの練習が戦闘に活かされているという主張は、学校教育を受けた彼らにとっても、戦闘が日常と地続きであることを示すものである。

〔事例六〕二種類の「銃」

同じく、ガールを持たないシュディエルが強調したのも、未来において参加する予定である戦闘についてであった。シュディエルは東ジカニィ・ヌエル出身の三〇歳で、人生の多くをエチオピアで過ごし、戦闘経験はない。シュディエルは次のように自身の将来を語った。

「いずれ地元に帰って戦闘に参加する予定。かつて、自分はペンと紙［筆者補足：教育のこと］がこの世界を生きていくための自分の『銃』だと思っていた。だけど、この南スーダンの状況をみると、ペンと紙では不十分だと気付いた。来年［二〇一七年］、一度地元に帰る。きっと地元のやつらは自分のことを笑うだろう。自分はガールもないし、『複写男』だと言って。でも気にしない。自分の兄弟たちが銃の使い方を教えてくれるだろうし、いざとなれば

自分にはペンというほかの兄弟たちがもっていない『銃』を持っているんだから。[23]」

この話をシュディエルから聞いたのは、南スーダンで再び政情不安への懸念が高まっていたころでもあった。多くの難民が南スーダンからウガンダからたどり着き、故郷の惨状を語っていたこともあるだろう。ヌエルの村落部での暮らしを経験したことのない者たちの中にも、にわかに戦闘への参加への意志を見せる者たちもいた。しかし、実際に彼らが戦闘に参加するかどうかはわからず、単なる「強がり」である可能性も否定はできない。村落部の状況や年齢組の構成員との関係を踏まえれば、参加しない可能性も十分にある。しかし、それでも彼らが主張するのは、単なるガールの有無や銃、教育という媒体ではなく、それらが体現する共同体への所属や自治の意識、共同体への尊敬の念であった。

(4)〈本物(オリジナル)〉と〈複製(コピー)〉の間の駆け引き

ジュマやシュディエルの発言からは、都市／村落、近代／伝統、個人／コミュニティ、平穏／戦闘のあいだを揺れ動くアンビヴァレントな感情が伺える。彼らのガールをめぐる解釈は、自身の所属するさまざまな位相の共同体とどう向き合い、「適切」な関係を築くことができるかという問題意識とかかわる。ヌエル社会において、「男らしさ」をめぐる〈本物〉と〈複製〉の関係は常に不安定であった。二〇一三年末以降に限らず、「種牛男児」の拒絶から「ガール（だけ）の男」の揶揄という転換が見られた一九八〇年代、そして「ガール的」価値規範がある意味復活を遂げた現在の事例からも、両者の要素は常に確定せずに文脈の中では不断の駆け引きが生じてきた。

すでに触れたように、ヌエルにとって共同体の問題は、チエンという共同体概念と不可分に存在する。チエンは直訳すると「家」を指し、日常的に「家に帰る」といった表現に用いられる語である。しかしそれは文脈により、自身の出身地や出身クランの名前を指す。チエンという語が指す集団の規模も、その時の状況により相対的に変化する。出身出自集団から、村、民族集団、そして国家レベルまで、自身が所属する「家」の範囲は変動する。チエンは、ヌエルの「文化」や「ヌエルのやり方」などと翻訳されるだけでなく、祖先の生きた時間や場所の名称を指すこともある。しかしこの語は、過去から継承されてきたヌエルの「伝統」を指すものでは必ずしもない。

チエンまたはその語によって表現されるヌエルの「文化」は、ウシや槍といった旧来の物質それ自体を指すのではなく、たまたまその物質が媒介してきた祖先やクウォスの意

思であったり、共同体における個人の義務であったりすることはすでに述べた。槍名を唱えることが、槍自体ではなく祖先への働きかけの重要性を指していたように、人々の関心は物象化されたもの自体というよりも、そのものが抱える概念体系にある。南スーダン独立時、ヌエルの人々がチエンとして語っていたのは、自らの投票により手にした、悲願の「自らの国家」のことであった［橋本 二〇一八］。二〇一三年末以降、人々の期待を裏切り続けた国家はもはやチエンとは呼ばれないかもしれないし、自らの所属する軍事勢力や民族集団が中心となって作る国家を新たなチエンと呼ぶ者もあるだろう。もちろん、現在の居住集団や都会風の暮らし、祖先とともにある故郷の村も依然としてチエンである。

社会変化の中で、「男らしさ」を形作るさまざまな媒体は変化を遂げたかに見える。しかし媒体がなんであれ、人々が「男らしさ」を語り、変化の局面に際し注意を払っていたのは時々のチエンに対する義務であった。若者たちが生きているのは、例えば学校の教室やクラスメイトが必ずしも「近代的」な自己の形成の支えにならず、サッカーの練習が戦闘経験に生かされるように、軍事、教育、父系リネージといった複数の概念的共同体や秩序が同時に存在し、その間を常に往来しなければならないという文脈である。当然のことながら、この文脈の中で形成される「本物の男らしさ」も流動し、人々が寄り添おうとする「らしさ」もまた日々うつろうものである。しかし、それはただ単純に一方向へと変遷するものではなかった。

今日はカンパラで都会風の生活を享受していても、明日は故郷で銃を手に取りブッシュに行く、つまり戦闘に参加しなければならないかもしれない。どの社会空間、秩序にも飛び込むのを躊躇し、あるいはそれらを同時に生きようとする若者たちは、自身の身体の持つ可能性と問答を続けている。若者たちの移動する視点は、その場に応じて〈本物〉的または〈複写〉的人間を組み立てるための筋道を見出そうとする。複数の秩序を生きる若者たちは、それらに同時に対応できるようなハイブリッドな「男らしさ」や「社会的自己」を形成しているのである。

6　おわりに

本論では、ヌエル社会の「男らしさ」を象徴してきたガールの価値の歴史的変遷と、二〇一三年末以降のガールをめぐる解釈から、複数の秩序に対応できるよう自らの額の皮膚の形式を解釈し、人生を方向付けようとする若者たちの在り方を描いた。

既存の研究において、村落／伝統／エスノ・ナショナリズムと関連付けられてきたガールは、二〇一三年以降の文脈において、新たな局面を迎えていた。ポストコロニアルな状況の下で「民族化」された身体は、戦禍の中では自身の生命を脅かすものでしかなくなった。さらに移民・難民たちが直面した「近代的」価値との対比でガールが「古臭いもの」として語られていることは、確かに「伝統の消滅」として位置づけることができるかもしれない。しかし、エスノ・ナショナリズムのなかを生きるうえで、あるいはその中で成立する社会生活のなかで、ガールとガールに付随してきた「男らしさ」の諸要素は、若い男性の生き方と社会関係に葛藤を引き起こし続けていた。

一九八〇年代以降、学校やそのなかで施される近代教育は、ガールを廃止する動きやそれへの共感を生み出しもしたが、同時にローカル社会が経験していた国家規模の紛争は、学校へ通う子供たちにコミュニティ自治の意識とガールの施術を煽る場ともなった。この時、軍事訓練や教育機関といった国家的、国際的な「通過儀礼」の場と、ヌエルの通過儀礼は同時に存在して相互に影響を及ぼし合い、子どもたちの手をそれぞれの秩序へと引っ張り合っていたのである。この状況の中でかつての「男児」たちが得た／得なかったガールをめぐる解釈は、現在でも彼らが所属している複数の共同体や秩序における生き方を映し出す。

「本物の男」、あるいはそれと対になる「複写男」をはじめとする「理想的でない」とされる「男らしさ」は、常に文脈依存的で構築途上のものであり、ガール以外にも様々な要素が「らしさ」を支えるものとして登場する。ガールにせよ、銃にせよ、教育にせよ、その時自身が所属する・したいと思うコミュニティ――チエン――の範囲によって要素は変化する。この時彼らが気にかけまた固執するチエンは、文脈によって自身の祖先や子孫を巻き込んだ出自集団、故郷の村、反政府勢力としてのヌエル、南スーダンという国家と様々に伸縮する。彼らのガールの解釈は、複数の共同体、複数の秩序の中に同時に所属できるように備え、場合によってはすぐに切り替え可能な「社会的自己」の在り方を示すものであった。

皮膚は、衣服と違って着脱不可能であるが、だからといって固定された記号＝意味となるわけではない。瘢痕のある身体・ない身体は、単純に額の形式から特定の意味領域へと還元されない、ハイブリッドな意味と主体性――「本物の男らしさ」――を持っていた。他者が瘢痕を持つ皮膚に対して見出す意味は、例えば「民族」であったり「伝統」であったりするかもしれないが、その皮膚を有する当事者は、常にこうしたイメージを引き受けつつも、それらを組

み合わせて意味を見出し、自身のものとしてその身体を再び取り戻そうと試みていた。

もちろんこうした「男らしさ」は、異性や年配者、そして後続の世代からのまなざしを強く受け、さらに変質してゆくものであり、本論で紹介したガールの解釈は一時的なものに過ぎないかもしれない。本論では移民・難民の若者男性に焦点を当てたが、それ以外の周囲の集団においていかに議論が展開し、どのような力が働きかけているのかについては引き続き検討される必要がある。

長らく続く紛争後社会において、ガールの有無は、男性たちが選択してきた、あるいはさせられてきた過去であると同時に、自らが生きてゆくことになる未来を予測し、示唆するものでもある。瘢痕をめぐる解釈は、皮膚の発する複数のメッセージと、それを特定のメッセージとして受け取る多種多様な共同体との不断の交渉過程を映し出す。意味の網の目である社会を生きる以上、人間はそれらの意味から逃れて生きることはできない。様々な意味・秩序への意思が凝縮する若者の身体の解釈からは、諸権力を引きつけつつも、その限られた選択の中で、それらを組み合わせ、仮にでも「主体的」であろうとする人間の悲願をのぞくことができる。

参考文献一覧

エヴァンズ＝プリチャード、エドワード、E.〔向井元子訳〕
一九七八　『ヌアー族』岩波書店。

橋本栄莉
二〇一八　『エ・クウォス：南スーダン、ヌエル社会における予言と受難の民族誌』九州大学出版会。
二〇一九　「難民の実践にみる境界と付き合う方法：ウガンダに暮らす南スーダン難民の相互扶助組織を事例として」『質的心理学研究』第一八号、七六―九四頁。

Falge, Christiane
2015　*The Global Nuer: Transnational Life-Worlds, Religious Movements and War*, Köln, Rüdiger Köppe Verlag

Feyissa, Dereje
2011　*Playing Different Games: The Paradox of Anywaa and Nuer Identification Strategies in the Gambella Region, Ethiopia*, NewYork and Oxford, Berghahn Books.

Grabska, Katarzyna
2014 *Gender, Home & Identity: Nuer Repatriation to Southern Sudan*, Oxford, James Currey.

Hashimoto, Eri
2021 "Negotiating Potentials on their Foreheads: Emerging Issue of Scarification among Nuer Youth after the 2013 Violence in South Sudan", In Christine Mbabazi Mpyangu, Wakana Shiino (eds.) *Contemporary Gender and Sexuality in Africa*, Bamenda, Langaa RPCID, pp.261-281.

Holtzman, Jon D.
2000 *Nuer Journeys, Nuer Lives: Sudanese Refugees in Minnesota*, Massachusetts, Allyn & Bacon.

Hutchinson, Sharon E.
1996 *Nuer Dilemmas: Coping with Money, War, and the State*, Berkeley, University of California Press.

Hutchinson, Sharon E.
2000 "Nuer Ethnicity Militarized", *Royal Anthropological Institute*, Vol.16, No.3, pp. 6-13.

Johnson, Douglas H.
1982 "Tribal Boundaries and Border Wars: Nuer-Dinka Relations in the Sobat and Zaraf Valleys, c. 1860-1976", *Journal of African History*, Vol.23, No.2, pp.183-203.

Jok, J. Madut and Sharon E. Hutchinson.
1999 "Sudan's Prolonged Second Civil War and the Militarization of Nuer and Dinka Ethnic Identities", *African Studies Review*, Vol.42, No.2, pp.125-145.

Seligman, Charles G. and Brenda Z. Seligman
1932 *Pagan Tribes of the Nilotic Sudan*, London, George Routledge & Sons, LTD.

Shandy, Dianna J.
2007 *Nuer-American Passages: Globalizing Sudanese Migration*, Florida, University Press of Florida.

Turner, Terence S.
2012 "The Social Skin", *HAU: Journal of Ethnographic Theory*, Vol.2, No.2, pp.486-504.

註

（1）本論文中のカッコ内にイタリックで示している語句はヌエル語である。

（2）本論の第四章および第五章で報告される事例の一部は、別の論考 [Hashimoto 2021] と重複している。本論はそれらの事例を身体論の観点から再分析したものである。

（3）ヌエルとディンカは、社会構造や生活環境、言語学的特性、宗教的諸概念などさまざまな類似点が存在する [Newcomer 1972, Southall 1976]。双方の社会とも、父系出自集団に基づく分節リネージシステム［エヴァンズ＝プリチャード一九七八］を有しており、時々の「敵」の範疇に沿って自集団を形成する。

（4）後述するように、特に紛争後社会において移民と難民の定義はあいまいであり、難民が移民へ、あるいは移民が難民へと変化することは頻繁にある。したがって本論では移民と難民を区別しない。

（5）ラック・ヌエルとロウ・ヌエルはまとめて中央ヌエルと表現されることもある。

（6）成人儀礼について、ガールの施術に加えて下前歯の抜歯を行う地域もあれば、ガールの施術のみを行う地域もある。「男らしさ」の要素の変化の過程も地域によって多様であることが指摘されている [Hutchinson 1996, p. 297] が、紙幅の関係からここでは議論の対象外とする。

（7）一枚岩ではないヌエルを国外でまとめ上げるために発達したのが様々なヌエルの自治組織である。自治組織はそれぞれ出身地別にまとまり、主に教育を受けた二〇代〜三〇代の男性がリーダーとなっている。これについては別稿［橋本二〇一九］を参照。

（8）ガール儀礼は通常、施術を受ける本人が父親の同意を得て行う。多くは食物が豊富にある雨期の終わり頃（一〇〜一一月）に行われる。執刀者は特に決まってはいない。施術が終わると少年たちは一時的に隔離され、様々なタブーを課せられる。執刀の当日と隔離の終了時には供犠が行われ、「バカ騒ぎ」や「卑猥な歌」が歌われる祝宴が続く。またガール儀礼の最中には、例えば伝統的知識の教授といった教育や道徳的修練のようなことは行われない［エヴァンズ＝プリチャード一九七八、三七七―三八五頁］。

（9）ヌエルでは性別や年齢、出自集団などによって食べることができる供犠獣の部位が異なる。

（10）連続した何年間かにガール儀礼を経験した少年たちは全員同じ年齢組に所属する。年齢組はヌエル全体で統一されているものではなく、下位集団や地域によって個別に編成されるが、隣接した集団の年齢組の名称や期間が一致していることがある。ほかの東アフリカの年齢組体系とは異なり、年齢組の名称は循環しない［エヴァンズ＝プリチャード一九七八、三八一―三八二頁］。

（11）ただし、ヌエルにおいて年齢組は行政的・司法的な政治機能を持つことはなく、また戦闘時における軍事的任務を負うわけではない［エヴァンズ＝プリチャード一九七八、三八五―三八六］。戦闘時は特定の年齢組の成員が戦いに赴くのではなく、戦闘可能な「大人の男」が、その都度地域的・親族的紐帯によって組織化される。

（12）ヌエルにおいてウシは、性別、成長段階、色や配色、角

の形状によって多様な名を持つ。男性は自分の所有している雄牛のうち一頭の名前を借りて自分の名前の一つとし、この名前で呼び合うことやその名前を自身で作曲する歌に盛り込んだりする［エヴァンズ＝プリチャード一九七八、六三―六九頁］。

(13) 例えば従来のレイディングにおいて、婦女子や老人、逃亡者は殺害の対象とはならなかった。

(14) ホワイト・アーミーとは第二次スーダン内戦期に編成された武器を持つ市民によるヌエルの自衛集団である。詳しくは以下を参照［橋本　二〇一八、二九二―二九七頁］。

(15) 本稿で使用されるすべての個人名は仮名である。

(16) 二〇一六年九月、カンパラでのインタビューに基づく。

(17) 二〇一六年九月、カンパラでのインタビューに基づく。

(18) 脚注7を参照。

(19) 二〇一六年九月、カンパラでのインタビューに基づく。

(20) 公的な年齢組の名称のほかには、年齢組の「愛称」は存在する。これは当該の年齢組の成員の性格や成員が誕生した際の状況を踏まえて設定され、地域別に異なっている。

(21) 当時、家畜や女性子どもの誘拐を伴う報復闘争が、ロウ・ヌエルと隣接するスルマ系の民族集団ムルレ（Murle）との間で激化していた。

(22) 二〇一六年九月、カンパラでのインタビューに基づく。

(23) 二〇一六年一〇月、カンパラでのインタビューに基づく。

（本学文学部准教授）

Between "Real Man" and "Photocopy Man": Hybrid Masculinities in the Post-conflict Society of South Sudan

HASHIMOTO, Eri

This study aims to describe the dynamics of Nuer masculinity in the post-colonial context. It relates the markings on their foreheads, called *gaar*, and how young Nuer refugees and migrants have been attempting to survive post-conflict societies since 2013 through various interpretations of *gaar* and masculinity, with their bodies having or not having such markings. *Gaar* is received through an initiation ritual and was once recognized as a symbol of a "real man" by the local Nuer community. Previous studies on *gaar* have clarified its role as that of creating social relationships and making sense of time and history by sharing names of age-sets that are joined through initiation. In the context of social transformations such as the post-colonial situation, civil wars, and refugee crises, *gaar* signifies the "traditional" style of masculinity. My fieldwork in the refugee and migrant communities in Uganda reveals new dilemmas related to *gaar* on young men's bodies, i.e. whether they have *gaar*, in the context of post-2013 ethnic violence. The reasons for *gaar* in the 1990s as well as current interpretations demonstrate how men try to achieve multiple forms of masculinities that the Nuer society has experienced. By using idioms of "real man" and "photocopy man" (meaning fake man), Nuer young people scrutinize how they can adopt several orders through *gaar* in different contexts such as the national situation of South Sudan, "modern" life in Uganda, and social relation with their lovers and families, mentioning their image of "community" or "home," called *cieng* in Nuer language. The skin of the human body is the border between self and others, showing what we are as a part of the "social self." *Gaar* is not necessarily a symbol of single masculinity. Nuer men's foreheads contain multiple relations and contexts, communicating with others through multiple "selves" or hybrid masculinities.